社会言語科学会ニュースレター 第22号 (2006年8月14日発行)

《日次》

- [01] 巻頭言
- [02] 研究最前線
- [03] 第 18 回大会のお知らせ
- [04] 博士論文情報

学会活動の振り返り、学際性の魅力を追求する

大坊郁夫 (大阪大学大学院人間科学研究科)

この3年間、会員各位のご協力をいただきましたことに篤くお礼申し上げます、会員歴も 短く、社会心理学をベースとする私としては、大きな戸惑いを抱きながらの会長就任であ りました、その際に申し上げたことの一つに、「コアとなる関心事に共通性を持ちながら会 員の研究領域が多岐に渡っていることの利点を持ち寄り、生かしていきたい。」ということ があります、いわゆる人文・社会系から理学工学系と幅のある関心領域ー異文化とも言え る一の研究者がこれほどに集っている場は他にはないはずです。それぞれが育ってきた研 究・教育背景が異なるので団体としてのコンセンサスは取りにくい面があります. しか し、研究面で言うと、狭い個別科学からでは見えにくい示唆が多方面から得られるという メリットは貴重なものです、その試みは、大会時の特別講演、テーマ講演、シンポジウム やワークショップなどに見ることができます、参加者の反応からも会員相互がこの学会に おいて関連する他領域から多くを吸収したいという姿勢が感じられます。また、研究誌の 特集企画にも、異なる背景の研究を互いに尊重しようとした姿勢が見られます。これらの 特徴は、この学会の設立趣旨を適切に継承していると言えます、それぞれの集団の凝集性 を高めるためには、共通する魅力的目標が必要です、多様性は現状ではありますが、それ 自体は目標とはなり難いものです.潜在する無尽蔵の研究パワーをどう生かしたらいいの か、学会としての紐帯をどこにどう求めるべきかを改めて問い直す必要がありそうです。 同時に、この学会の活動が社会の well-being に生かされることを今以上に意識して、「各 人が研究の基盤として、人を結びつけ、適応的、調和的な社会を目指すことをさらに謳っ ていきたいものです」(「社会言語科学」7巻2号,2005年-巻頭言拙文-).

なお、会員数に比して1回あたりの大会参加者は決して多くありません。多少とも会員の活動の仕方に偏りがあるのでしょうか。近年は学会が多様に設立され、重なりが多くなっていることとも関連しているかも知れません。大会の魅力度を高めるための工夫が常に考えられています。また、学会の未来を語る会が毎大会時に開催され、熱心に語られています。多様な試みを重ねてきておりますが、どう評価していただいているでしょうか。

この3年間に、理事会での議論を通じ、学会運営上いくつかの工夫をして来ました。多岐に渡りますが、主な点としては、1)一部の会員(理事、委員)への負担集中を避けるため、事務作業の統一化を図るために、長い準備期を経た上で事務委託を開始したこと(ま

だ、部分的ではありますが)、2)名誉会員制度の設置、3)学会賞の改訂(2本立て)、4)学会としての出版(学会活動の幅を内外に問う象徴的なものと言えましょう)、委員会活動の一層の組織化(各委員会財政の総合、任期、規程の整備を含め)、そして、これも重要なことですが、5)財政の見直し(収入、支出比率の健全化を追求)についての議論などがあります。財政面で言いますと、大会が年2回開催することに伴う支出は大きいものです。同時に参加者がそう多くないこととのバランスをどうとるのか、各種費用との関連もさらに検討を要するところです。大会当日のプログラム次第での参加思案では学会の維持はなかなか円滑にいかないものがあります。

これまで、いくつかの工夫を試みましたが、学会運営は多くの役員のアカデミック・ボランティアによって成立しています。規模が大きくなるほど、この点への注目は薄れやすくなるものです。事務委託を契機として改めて意識し、学会活動の共有を期待いたします。これまでのご協力を改めて感謝いたしますとともに、永瀬会長の新体制で、学会活動がさらに充実していくことを一会員として祈念いたしております。

 F 0 0 7		 	 	- $ -$
コロクエ	研究是可规			

「話が上手い人」ってどんな人?—円滑な対人コミュニケーションのメカニズムの解明

磯 友輝子 (大阪大学大学院人間科学研究科)

コミュニケーションがとても得意な人もいれば、苦手な人もいる。また、友達あるいは初対面の人との会話、スピーチやプレゼンテーション、課題解決場面など多様な場面でコミュニケーション力を発揮できるマルチプレイヤーもいれば、初対面での会話のような特定の場面を不得意とする人もいる。では、なぜこのような違いが生じ、それがどのような行動の差異として現れ、対人印象に違いが生まれるのだろうか。そこに関わるコミュニケーション能力、行動、印象との相互関係を検討し、その能力向上を望んでいる人に何らかの示唆を与えられる研究をしたいと考えている。…と、壮大な研究目標を述べたものの、現実にはコツコツと小さな知見を積み上げている段階である。

私はコミュニケーションが上手い人のことを「話が上手い人」と呼んでいる。なぜならば、「話が上手い」という対人印象はあらゆる対人コミュニケーション場面で共通して使用される言葉であり、その言葉に包含される意味を多様な対人場面を設定して読み解くことが、上記の研究目標を達成する手立てではないかと考えているからだ。そこで、実験的に2人あるいは3人の様々な話題の会話場面を設定し、コミュニケーション能力(社会的スキルや非言語的表出性、セルフモニタリング傾向など)の違いで生じる非言語的行動の生起時間や生起頻度を比較したり、会話への満足感や対人印象との関係を検討している。たとえば、非言語表出性が高い人ほど満足感が高かったり、3人で討論するならば会話相手の発言割合に対応するようにうなずくと「話が上手い」という印象を獲得することが示されている。この他、質問紙調査を通してコミュニケーション能力と他者の行動や印象の認知構造の違いについても検討している。最近は、メタ知覚能力(自分について他者がどう捉えているかを認知する能力)の獲得メカニズムに興味があり、他者認知の構造や自らの表出レパートリーを構成する知識構造との関連性を検討したいと考えている。

ところで、実は、「研究最前線」執筆のお話を頂いた際、果たして自分が執筆できる立場にあるのかと悩んでいた。というのも、社会心理学の分野ではコミュニケーションそのものを扱う研究は「最前線」ではなく、どちらかというとマイノリティなのである。しかしながら、社会言語科学会は「言語・コミュニケーションを人間・文化・社会との関わりに

おいて取り上げそこに存在する課題の解明を目指す」という趣旨にあるように学際性を謳った学会である。すなわち、どのような学問分野であれ、コミュニケーションを扱っていればマジョリティになる可能性を秘めていることになる。その可能性を信じてこの原稿を書いている次第である。私のように非言語的行動を扱う研究では、心理学的手法の王道である質問紙調査や認知的反応の測定だけでは十分な知見を得られないため詳細な行動の分析が必要になるのだが、社会言語科学会の大会に参加すると類似したアプローチを試みた研究がここそこに見られ、少しだけ"マジョリティになった気分"を味わえる。

上記の経験から、研究分野にとらわれず、コミュニケーションに言及した理論について 学内の院生達と勉強することにした、非言語コミュニケーション論や異文化コミュニケー ション論、機械論、社会的システム理論、相互作用論など扱う理論は多岐にわたる。そし て、コミュニケーションに関連した心理学の論文を様々なコミュニケーション理論の視点 から捉え直す作業をしている。もちろん、すべての理論で説明できる研究などありえない が、別の視点で読み解く努力をすることが、ややもすれば自分の分野の殻に閉じこもりが ちな研究者の頭を柔軟にし、研究に広がりをもたらしてくれるのではないかと考えている。

目下の課題は自分の研究テーマを学際的な視点から捉えることである。それが社会言語 科学会の"正式なマジョリティ"として認められるために必要な条件なのではないかと考え ている。

社会言語科学会の第 18 回大会(北星学園大学)は、以下の予定で行われます。

【日時】 2006 年 8 月 26 日 (土), 27 日 (日)

【場所】 北星学園大学

〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西 2-3-1

http://www.hokusei.ac.jp/

交通: 市営地下鉄東西線「大谷地」駅から徒歩約5分

〇 招待講演

「無文字言語のゆくえ — 北方少数民族言語はどう生き残れるか?」 津曲 敏郎(北海道大学)

- 〇 テーマ講演
 - ・「言語行動の日韓対照 ーその成果と問題点ー」 生越 直樹(東京大学)
 - 「会話の科学は可能か」伝 康晴(千葉大学)
- 〇 ワークショップ
 - ・「解放的語用論の展開に向けて: その基本理念と応用」 企画責任者: 片岡邦好(愛知大学)
 - ・「多人数インタラクションの多様性とダイナミズムー 多人数インタラクションでは何が多くなるのか?」 企画責任者: 榎本美香(千葉大学/東京農工大学)
 - ・「新しい音声バリエーションの研究ー 日本における社会音声学の確立をめざして一」 企画責任者:二階堂整(福岡女学院大学)

※ プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください.

http://www.wdc-jp.com/jass/18/

<社会言語科学の未来を作る会 第9回集会のお知らせ>

学会をより魅力的なものにするために、気楽な雰囲気でわいわいがやがや話す会です。 多くのみなさまのご参加お待ちしております。

日時: 2006 年 8 月 26 日(土) 懇親会終了後

場所: 北星学園大学 (懇親会終了後, 懇親会場受付に集合)

主催:社会言語科学会企画委員会

今期はご連絡をいただきませんでした. 博士を取得された方は、題目、氏名、連絡先、学校名・研究科名、取得した年月、概要(150 字程度)を事業委員会(jigy@jass.ne.jp(*))までご連絡ください). ホームページ上で掲示させていただきます.

(*) プログラムによるアドレスの自動収集を避けるため、@は全角になっています. 半角にして置き換えてお使いください.

発行: 社会言語科学会事務局 E-mail: jass-post@bunken.co.jp URL: http://www.jass.ne.jp